

一、「韓竈神社由来」の記

韓竈神社 宮司 佐々木 祐

神社入口鳥居脇の案内板に次のように由来が記されている。

【鎮座地】 出雲市唐川町字後野四〇八番地

【主祭神】 素盞鳴命（スサノオノミコト）

【由緒】 出雲国風土記（七三三年）には韓鏗社からまのやと、延喜式神名帳（九二七年）には韓竈神社からまのかみやとと記されており創立は不詳であるが、非常に古い由緒を持つ神社である。社名の、カラカマは、朝鮮から渡来した「釜」を意味するとされている。即ちこれは、祭神の素盞鳴命が御子神と共に新羅しらまに渡られ、我が国に「植林法」を伝えられると共に「鉄器文化」を開拓されたと伝えられていることと、関係があるろう。又当社より奥部の北山山系が、古くから産銅地帯といわれ、金掘り地区の地名や、自然銅、野タタラ跡、などが見られることと、鉄器文化の開拓と深い関係があるといわれている。

松江藩の地誌「雲陽誌」（一七一七年）によると、当社は、素盞鳴命を祀るとして、古老伝に『素盞鳴命が乗り給いし船なりとて、二間四方ほどの平石あり、これを「岩船」という、この岩は、本社の上へ西方より屋根の如くさしかざしたる故に、雨露も当たらず世俗に「屋方石」という。又、岩船のつづきに周二丈余り、高さ六間ほどの丸き立岩あり、これを「帆柱石」という。社の入口は、横一尺五寸ばかり、高さ八尺ほどの岩穴となっており、奥の方まで二間ばかりあり、これが社までの通路となっている』と記されている。

【例祭】 十一月三日

岩 船

「古老伝」によれば、韓竈神社の祭神、素盞鳴命は、この地方に「植林法」や「鉄器文化」を開拓されたといわれているが、この「大岩」はその際乗られた舟であると伝えられている。